２０２３年１２月分総評　杉本真維子

「哲学で都会の色を見上げれば／おれのなんにも無さが　飛行機」白野（新潟県）
この「おれ」の無骨さが放っているにぶい光を、信頼と名づけたい。

「ストローにもうない十二月を吸う」中矢　温（愛媛県）
煌びやかなクリスマスと賑やかな年の瀬。それらが「もうない」新年のさみしさと空虚がストローのからっぽの息とよく重なります。

「ねむるまで／泣かない馬を編んでいる」藤ほたる（神奈川県）
経験ではなく観念で編まれた「馬」の魅力。子供から大人まで、誰にとっても平等な「馬」がここにいます。

「金平糖落ちたところは違う星」飛和（長野県）
「金平糖」自身の戸惑いが伝わります。世間知らず、という一つの美が描かれています。

「白黒黒白黒白の服歩く／横断歩道に差し色の赤」花野　木春（東京都）
このように、モノをかたちから見る、というのは創作に欠かせない構えでしょう。

「千切りに小さい母の声がある」杉本　太（北海道）
小さきものの力がよく表されています。千切りという小さきものの隙間を埋めつくすような小さき母の声が圧倒的です。

「ぎょうにんべんに連れて行かれる／人たちを見たことがある」霧島黒酸塊（新潟県）
ひらがなで書く「ぎょうにんべん」の得体の知れなさがよいですね。ぎょうにんべんのなかににんべんが入っているところも恐ろしくかつ魅惑的です。

「封筒の宛名の下書きの誤字を／微熱が浮かす　「生き直したい」」常田　瑛子（山口県）
ひたむきさ、という語りがたいものが言葉で象られていることに打たれます。

「酒乱との上澄みに舟乗せて／ふたり小瓶の中だけの虹」五月閉じ花（北海道）
限られた場所でのみ輝くものの尊さが感じられます。

「信じるとは、／想像力を働かせないこと／揺れるイオンの３階」あお（奈良県）
鋭い気づきに一票。たしかに、信じる、ということは、想像力の羽をゆったりと休ませることかもしれません。

「みりんふうっていうとき吹く風／みりんかぜ／本父さんになるよこれから」結城熊雄（東京都）
語感からほんものの「風」を敏感につかみとっています。

「どれほどの冷たさだろう／人肌をおぼえたあとの／冬のブランコ」羽水繭（大阪府）

モノの命が喋りだすという稀有な瞬間に立ち会っています。

「そっと押す問診票のボールペン／注射器めいた動きしやがる」青桐紗矢（神奈川県）
「しやがる」の自虐がもつあたたかさに心打たれました。

「恥は蓄光／布団の中でお腹の辺りが光り出す」白藤　さくら（神奈川県）
恥が光ることに瞠目。恥の痛覚の本質が捉えられています。

　それでは、今回も新鮮で刺激な作品を寄せていただき、ありがとうございます。次回も投稿を楽しみにお待ちしています。